2003年2月1日発行第7巻第1号(通巻37号) 隔月[スヌーザー]

snoozer

MAGAZINE FOR GI... ...P IN BLUE

2
2003
特別定価
730YEN

【2002年ポップ・ミュージック年鑑】

THE MUSIC + THE VINES

【50 BEST ALBUMS + 40 BEST SINGLES】

BECK
ARTIST OF THE YEAR

PRIMAL SCREAM
BAND OF THE YEAR

SNOOZE IN, SNEEZE OUT

特集：2002年ポップ・ミュージック年鑑

snoozer
ISSUE #035 CONTENTS

FRONT COVER

CRAIG NICHOLLS (THE VINES) & ROBERT HARVEY (THE MUSIC) by KEETJA ALLARD

『スヌーザー』史上最も"若い"表紙となりました、ザ・ヴァインズ&ザ・ミュージック! この表紙の撮影現場は、実はアメリカ・ツアー先でのザ・ヴァインズの楽屋。狭い部屋の中で頑張って撮ったので、実は足下にはドリンク・ボックスやメンバーの荷物が所狭しと転がってたり。片付けも両バンド・メンバーまで手伝わせたり、私は何故か撮影の合間にメンバーの洗濯を手伝わされたりと、やたらアットホームな一日でした。(唐沢真佐子)

2003年2月1日発行第7巻第1号（通巻37号） 隔月［スヌーザー］

2
2003
特別定価
730YEN

THE YEAR IN MUSIC 2002

2002年ポップ・ミュージック年鑑

THE MUSIC + THE VINES

2002年のポップ・ミュージック・シーンを振り返ろうとする時、我々が決して見落としてならないのは、「新世代の台頭による、ドラスティックな世代交代の兆し」という動きだろう。中でも、ザ・ヴァインズとザ・ミュージック、この2バンドの、新人としては異例の大健闘を抜きにして、2002年のポップ・シーンを語ることは出来ない。方や、「2002年最大のハイプ」という汚名を着せられながらも、アメリカとイギリスでの破格の成功を収め、壮絶なライヴ・パフォーマンスで全世界のシニカルな連中を、次々と説き伏せつつあるザ・ヴァインズ。そして、日本ではややハイプめいた印象はなきにしもあらずだが、充実したライヴ・パフォーマンスで、日本とイギリスにおいて、新人としては破格のファン・ベースを築き上げたザ・ミュージック。そう、我々『スヌーザー』は、2002年の顔として、この両バンドのフロントマン――クレイグ・ニコルズとロブ・ハーヴェイの二人を選出した。今号のカヴァーを飾る写真は、ザ・ヴァインズがメイン・アクトとして、ザ・ミュージックがサポート・アクトとして、共に全米ツアーを開始した、まさにその記念すべき日に撮影したものだ。そして、この2バンドに共通しているのは、60年代後半のロック黄金期への憧憬、そして、音楽に対する底なしの愛情に他ならない。いまだ音楽的には発展途上にあるものの、彼らには「僕らはギターを持って、歌わねばならなかった」という必然がある。そう、我々は今後も、彼らを絶対的に支持する。そして、彼らの未来に猛烈に期待する。そう、あなたも

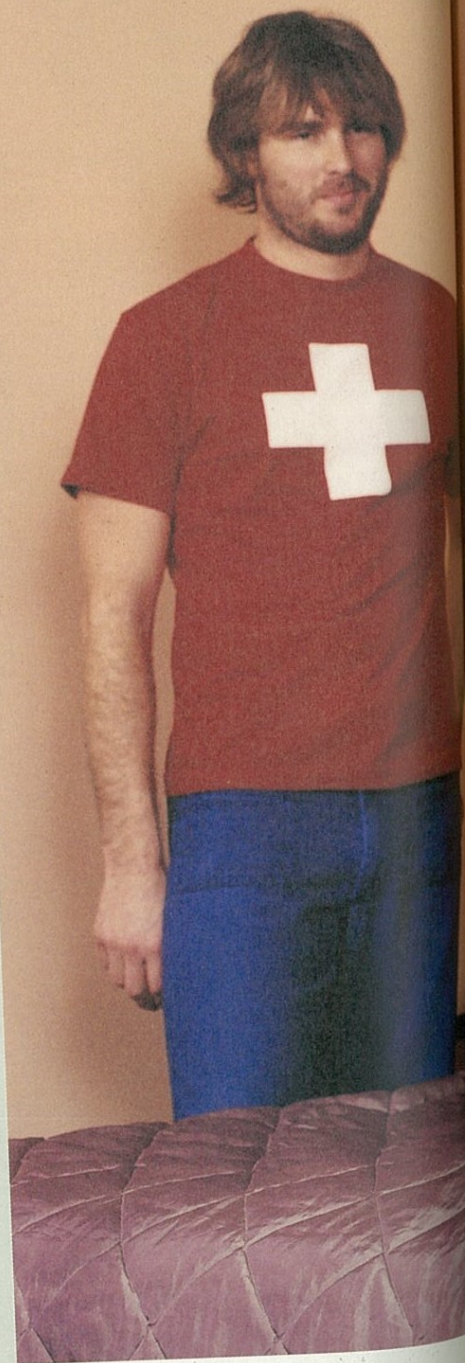
THE VINES

by MASAKO KARASAWA　photography by KEETJA ALLARD

2002年という年は、新たな世代が誕生した年として、
そして、音楽シーンに新たな可能性と輝きが生まれた年として、
10年後、きっと語られることになるに違いない。
世界中にそんな予感を感じさせたのは、ザ・ヴァインズだった。
アイム・ゴナ・ゲット・フリー！ ライド・イントゥ・ザ・サン！――
そう、そんな彼らの言葉は、新時代の幕開けの宣言だった。
音楽が持ちうる、あらゆる可能性と情熱だけを信じて突き進む、
ストーリー・オブ・ザ・ヴァインズ、第一部完結編!!

この「2002年ポップ・ミュージック年鑑号」の表紙を、ザ・ヴァインズとザ・ミュージックで飾れたということを本当に誇らしく思う。勿論、昨年はさまざまな素晴らしい音楽との出会いがあった。ただ、その中でも、一番に私達をリフトアップしてくれたのは、彼ら新世代バンドの登場だったはずだ。ここから何か新しいことが始まるかもしれない、想像もしなかったような新しい時代が始まるかもしれない――彼ら新世代のサウンドは、そんな無限のイマジネーションを広げてくれなかっただろうか。以前、クレイグはこんな話をしてくれたことがある。「1960年代の音楽には、『次に何が起こるか、自分達がどこに行くのかわからないけど、とにかくエキサイティングだ』っていう感じがあるんだよね。僕はそれに共感するんだ」。そう、この言葉は、私達が彼の音楽に感じた興奮と、まったく同じだ。そして、その興奮と希望が産み落とされたことこそ、2002年一番の幸運な出来事だったのだ。

ただ、もう一方で、こんなにも早くザ・ヴァインズでカヴァー・ストーリーを書く日が来るなんてなぁ、というのも私の正直な気持ちだ。なにせ彼らはたった一枚のアルバムを作り上げたばかりの、来日すらしていないバンドなのだから。だが、残念なことに、2月に開催される〈マジック・ロック・アウト〉フェスティヴァルでの初来日は、結果としてキャンセルになってしまった。バンドは、この来日の他にも、同じく2月に予定されていた英国〈NMEアウォード〉への出演もキャンセル。その理由は公式には発表されていないものの、『NME』誌の情報と日本のレコード会社の担当女史の話を合わせると、「1月末の〈ビッグ・デイ・アウト〉フェスティヴァル出演後、そのままオーストラリアに留まり、2ndアルバムのレコーディングに入りたい」ということと、「クレイグの、極度な飛行機嫌い」によるもの、ということらしい。そして、やはり、一年近くに及ぶ欧米でのツアー生活による、肉体的／精神的疲労というのが一番の原因だろう。初めて顔を合わせた8月時点で、クレイグはすでに2ndの制作に取り掛かることが出来ないことの苛立ちを語っていたのだから、それから約半年後の今、そのストレスが爆発してしまったことに何の不思議もない。とは言え、今号の表紙も、当然、この来日を見据えてのものだった。ザ・ヴァインズというバンドの存在に、まだ半信半疑な多くの人に彼らのライヴを観てもらいたい、どれだけのものを秘めているバンドなのかを確認してもらいたい、という思いを込めた表紙だった。だから、そう、やっぱり残念でならない。ただ、（これは今だからこそ言えることではあるのだけれど）例え2月の来日が実現していたとしても、疲労の極限をとうに越えてしまった彼らのステージングは、決して良いものにはならなかったに違いない。そう、記念すべき初来日は、やはりベストなコンディションで、ベストな環境で、そして一人でも多くの最高のファンと共にあってほしい――今は、そう願うばかりだ。

このインタヴューが行われたのは、11月19日。場所は、ニューヨークから車で2時間ほどの大学都市、フィラデルフィア。この日から、ザ・ヴァインズとザ・ミュージックのアメリカ・ツアーが始まったのだ。MTVが主催となり、全米12ヵ所を巡るこのツアーは、ザ・ヴァインズにとっては二度目のヘッドライン・ツアーとなる。昨年の夏以降、『ローリング・ストーン』誌を筆頭に、あらゆる雑誌の誌面を飾り、アメリカではもはや2002新人バンド勢の顔役となった彼らにとっては、「ただの流行りバンド」ではない、もうワン・ステップ上を目指すためのツアーと言えるだろう。一方、ザ・ミュージックにとっては最初のUSツアー。この後、2月末からも、コールドプレイのサポートとしてアメリカ・ツアーが決定、同月には遂にアルバムのアメリカ盤リリースが決定している彼らにとっては、アメリカのオーディエンスへの"初顔見せ"となる重要な意味を持つツアーだ。その初日ということもあり、バンドのスタッフも、会場もピリピリとした空気が張りつめている。しかし、私は、その合間を縫って両バンドの撮影に、表紙用の写真撮影、そしてクレイグの取材をしなければならない。すでに朝から私の胃もピリピリしっぱなしだった。何よりも、クレイグのことを考えると気分が重くなる。本当に元気なんだろうか？ 夏以降も続いたツアーでボロボロになってるんじゃないだろうか？ ナーバスになってて話なんて出来ないんじゃないだろうか？――撮影現場で待っ

僕はいつも「おとぎ話みたいな曲になって欲しい」って思いながら曲を書いてるんだ。それが、テレビで見たひどいニュースからインスパイアされたものであってもね。人生がいつもハッピーなんてわけにはいかないだろ？ だから僕は、困難を感じる時、おとぎ話を作る。それは、僕にとっての逃避手段であり、それ以上の意味を持ってくるんだ

てる間にも、そんな不安ばかりが頭に浮かんでくる。

時間通りにやってきた3人のメンバーから遅れること30分。小さなCDデッキを片手に、「ほんっとにゴメン……」と申し訳なさそうな笑顔を浮かべながらクレイグが部屋に入ってきた。その瞬間、ややビビる私。「……ちょ、ちょっと太った？」とは、声に出しては言わなかったものの、お約束のようにマクドナルドのフィレオフィッシュとチキンナゲットをボリボリ食べるその腹と顎の辺りが、以前よりも明らかに膨らんでいる。……これって、やっぱりストレス太り？ 「音楽、かけてもいいかな？」と言って、自分のCDケースから選んだのは、スウェードの『ヘッドミュージック』。フィラデルフィアの、涼しく澄んだ光が差し込む部屋の中に、大音量でブレッド・アンダーソンの悶え声が鳴り響く。ホント、この人、こういう曲がったのが好きなんだね。他にクレイグが持参していたCDは、リチャード・アシュクロフトを2枚、後期ヴァーヴが2枚、スーパーグラスの最新作、ミューズ『オリジン・オブ・シンメトリー』、レッド・クロスの『フェイズシフター』、「2ndのデモ!」と書かれた自分達のCDR、そしてザ・ミュージックのアルバム。「あとコレ！ さっきスタッフの人から、ザ・ミュージックの7インチをもらったんだ!!」と、満面の笑顔でメンバーに自慢していた。そう、とにかくクレイグは、ザ・ミュージックと一緒にツアー出来ることが嬉しくてたまらないらしい。実際、ライヴでザ・ミュージックが始まった瞬間、楽屋のソファから飛び上がって、「ほら！ みんな、ザ・ミュージックを観に行かなきゃ!!」と階段を猛ダッシュで駆け降りて行くほど、クレイグははしゃぎっぱなしだった。何せ、あまりの勢いでフロアまで出ていこうとしたために、セキュリティのスタッフに怒られていたくらいなのだから。そして、そんな姿こそ、クレイグ・ニコルスの、ザ・ヴァインズの、音楽のとても本質的な魅力なのだ。「僕は音楽から、たくさんの大切なものを教えてもらった。だから、次は僕が音楽に何かを還す番なんだ」。これは、インタヴューをする度に登場する、クレイグの口癖だ。そんなあまりに無邪気な、信仰にも似た音楽への愛情――ザ・ヴァインズが鳴らしているのは、もしかすると、それだけかもしれない。そう、クレイグにとって、曲を作り、ステージに立つということは、自分をブルーヴすることですらない。彼らの『ハイリー・イヴォルヴド』というアルバムは、そんな風に、ただ「音楽と共に生きること」の喜びに満ちたアルバムだ。

だからそう、誰が何と言おうと――私は一人のジャーナリストとして、そして音楽が大好きで、必要としている一人の人間として、彼らの音楽を信頼し愛さずにはいられない。だって、ザ・ミュージックのステージへと階段を駆け降りていったクレイグとは、FRFのグリーン・ステージへと駆けていったアナタの、ダンス・フロアへと向かってゆくアナタの姿に他ならないからだ。

――――――― interview with CRAIG NICHOLLS

●ザ・ヴァインズとザ・ミュージックのツアーだなんて、本当に楽しそうな組み合わせが実現しましたね。

「うん、僕も今からすっごいエキサイトしてるんだ。きっと、ザ・ミュージックがプレイし始めたら、僕なんて盛り上がりすぎて収集つかなくなっちゃうだろうな（笑）」

●（笑）とは言え、こうやってツアーが続いていく中で、クレイグはどんどんシンドそうになっていってるわけじゃない。肉体的にも精神的にも。それを目のあたりにすると……こうやって取材とかすることで、さらにあなたを追いつめてるんじゃないか、って。

「いや、ホントに大丈夫だよ（笑）。たとえ、実際に辛いって感じることが多少あったとしても、楽しさの方がずっと勝ってるんだから。それに、僕が辛さを感じてるのは取材のことじゃないんだよ。僕にとって一番しんどいのは、移動することそのものなんだ。でも、こうやってザ・ミュージックと一緒にツアーも出来てるわけだからさ。そこには、本当にエキサイトしてるし」

●うーん……。

「大丈夫だから（笑）」

●OK。ついさっきサウンド・チェックを聴かせてもらったんだけど、新曲、増えてますよね。

「うん、セット・リストの中にも3曲は含まれてる。“EVIL TOWN”に“FUCK THE WORLD”、それと“AMNESIA”だね」

●でも、どの曲も、サウンド・チェックを聴かせてもらう限りでは、前よりもバンド・サウンドにしっくりきてるっていうか――以前の曲よりも、やっぱり「今のザ・ヴァインズにしっくりと合う曲」っていう感じがした。

「そう、その“しっくりくる”って点では、僕自身も驚いてる最中なんだ（笑）。でも、それって新曲だけに限らず、昔の曲でも起こってる気がするんだよ。僕ら全員が、以前よりもずっと上手く弾けるようになってるから、昔の曲を弾いてもすごく楽しいんだ。それこそ、その曲を作った当時よりもね。ライヴ・バンドとして、僕らは確実に良くなってきてると思う。それに、この4人のラインナップになってから、まだ一年くらいしか経ってないだろ？ だから、まだライヴでのいろんなことが新鮮に感じられるっていうのもポイントなんじゃないかな」

●じゃあ、新曲について、ちょっと詳しく訊かせて下さい。まず、“EVIL TOWN”。この曲のモチーフになったものって、どういうものなんだろう？

「やっぱりタイトルにもある通り、ダークな曲だよね。僕が思うに……この曲のテーマは二つあると思う。一つは“人”で、もう一つは“場所”。ただ、これ以上細かい説明をするのって、難しいんだ。なんていうのかな、ビジネス関係とか、まあ他の関係も含めて、誰か人に出会った時の気持ちっていうのかな。或いは、いろんな場所とか、知らない街を訪れた時の気持ちっていうか。あと……“誘惑”っていうのもあるかもしれない。普段、生活する中での世俗的な誘惑……。物質的なもの、世俗的なものにすごくこだわってる人間、っていうのがテーマかも。わかんないけど（笑）。ただ、そもそも、僕らにとって曲で一番重要なのは、全体の雰囲気とか印象でさ。だから、歌詞のディテールを説明するのって、すごく難しいんだよね（笑）。やっぱり、僕自身、まだ歌詞について理解しきれてないところが多いし」

●でも、考えてみると、『ハイリー・イヴォルヴド』の中には、ダークな曲って、多分なかったと思うんだよね。

「そうだね。でも、例えば“EVIL TOWN”や“FUCK THE WORLD”って曲はダークかも知れないけど、それと同時にすごくメロディアスな曲でもあるわけ。そのメロディとダークなムードの組み合わせっていうのが、今度のアルバムの狙いでもあるんだよね。僕らにインスピレーションを与えてくれるありとあらゆる音楽、あらゆるサウンド・ヴィジョンの双方が合わさったものが、2ndアルバムのサウンドになるんだと思う。つまり、ヘヴィな曲はこれまで以上にダークに、メロウな曲はもっと抑制が効いた感じっていうか……うん、コントラストがはっきりしてるっていう。ちょっと極端なくらいにね」

●ダークでムーディな曲っていうのは、これまでにも書いてたことはあったのかな？ それとも、今回が初めて？

「うーん、古い曲を引っ張り出してくれば、二つ三つは出てくるかもしれない。でも、ちゃんと形にするようになったのは、最近からなんだ。何ていうか……本格的なダーク・フェイズ第一期の始まり、っていう感じなんだよ（笑）。でも、もともとそういうのは好きなんだ。勿論、“悪魔崇拝”とかそんなんじゃなくて（笑）、“パワー”がテーマってことになると思うんだけど」

●そういう作風の変化、広がりは、あなたがこの一年間でソングライティングの方法なり、そのテーマや世界観に新しいものを発見した、ってことになるのかな？

「曲を書いてる時に、自分が何を考えていたか、僕ってあんまり覚えてない方なんだよね。当然、曲によってインスパイアされるものも違うわけだし。例えば、自分と他の人との関係性にインスパイアされた曲もあるし、テレビで見たものが影響してる曲もあるだろうし――ニュースで流れてるひどい出来事とかね。ただ、いずれにせよ、それが何にインスパイアされたものであれ、僕はおとぎ話みたいな曲になって欲しいと思って書いてるんだ。つまり、歌うことが逃避手段になってるわけ。だって……人生がいつもハッピーなんてわけにはいかないじゃない？ 例えば、僕なんかはツアーするのは大好きだけど、飛行機に乗るのは本当に怖かったりする。そういう、ある経験を困難に感じる時……僕は、サウンドとか、曲にフィットするイメージを盛り込んだ、おとぎ話を創作してるんだ。だから、曲を作ることは、僕にとっての逃避手段であり、それ以上の意味を持ってくるっていう」

●なるほどな。逃避、エスケープっていうのは、ある意味、『ハイリー・イヴォルヴド』の曲の中にも、多く登場

星の数ほどバンドがいる中で、こうやってアルバムを作るチャンスにも恵まれて、しかもザ・ミュージックや、ホワイト・ストライプスなんかと一緒に音楽がやれるなんて、僕にとっては、もう信じられないくらいに最高のことなんだよ! そういうことがすべて、僕には神聖なものであり、本当にパワフルな体験なんだ

してくるテーマでもありますよね。

「そうそう。で、音楽をその手段として使ってるっていう。ただ、あのアルバムでは、『何かから逃げ出そうとする』っていうよりも、『何かに向かって走ってゆく』って感じだと思うんだ」

●ああ、そうか。なるほどね。じゃあ、そういったフィーリングは、新しい曲、次のアルバムの中にも続いてるものなんだと思いますか?

「あ、うんうん。それは確かにそうかも。今度のアルバムの歌詞はもっと成熟したものになって欲しいって思ってるんだけど、テーマ的には同じ感じかもね。ほら、誰だってパーフェクトな世界で生きたいって願ってるものじゃない? で、それって音楽の中では可能になるんだよ。たとえ、物質社会で現実にはならなくても、音楽の中では本当のことになりうるものなんだ。だってさ、ほら、CDをかけた瞬間に、その音楽の虜にさせられることってあるだろ? ヘッドフォンを付けて聴いてる時にも、ライヴでバンドを観ている時にも、肉体的にも精神的にも刺激って出来るものなんだ」

●例えば、キンクスのレイ・デイヴィスなんかは、いつも曲の中に、ヨーロッパの斜陽の田園風景といった情景を描いているじゃない? それは、ある種の楽園をイメージさせると思うんです。例えば、あなたの場合も、そういったイメージ、楽園を聴き手に感じて欲しい、と思うところはあったりするのかな?

「うん! それはもう絶対にね! 実際、『ハイリー・イヴォルヴド』を作ってる時には、キンクスのアルバムをよく聴いてたんだ。特に70年代の、『スリープウォーカー』なんかをね。彼らってさ、すごくクールな発言をしてきた人達だろ? で、特に有名なのが『こいつは、生きるための音楽なんだ』ってやつなわけだけど——レイ・デイヴスは言葉だけじゃなくて、まさにそれを実行してた人だと思う。彼の作り出した曲は、本当に彼の人生であり、彼の表現だったんだ。ほら、"1969"なんかは『僕は音楽ばっかりを聴いていて、それだけが楽しみなんだ』って曲なわけだけど、レイ・デイヴィスが言いたかったことも、それと同じだと思うんだ。何よりも自分自身の為に音楽をやってる、紛れもなく偉大なアーティストだけど、それと同時に他の多くの人達ともそのフィーリングを分かち合ってるっていう……それって、言葉にするのはすごく難しいんだけどね。うん、でも、とりあえず60年代のキンクスはグレイトなアルバムを何枚も作り出したと思う。だから、彼らについての意見はたくさんあると思うけど——彼らの曲を聴くと、僕はその歌の主人公が本当に自分に話しかけてるような気がしてくるんだ。ストーリーを伝えてくれる、っていうのかな。しかも、そのストーリーが真実か嘘かなんていうのは、どうでもいいことなんだよ。聴き手を気持ち良くさせてくれる限りはね。で、それこそが一番大事なことだと僕は思う」

●じゃあ、あなた自身が、聴き手に感じて欲しい、イメージして欲しいと思うフィーリングなり情景なりは、例えばどんなものだと言えると思う?

「そうだなぁ……言葉に出来ない思い、かな。何ていうか……『ああ、なるほどなぁ!』とか、『今のパート、すっごいな!』とかさ、レコードを聴いてると何ともいえないような喜びが沸き上がってくるものであってほしいと思う。それがヘヴィな曲であってもね。例えば、僕自身は"ゲット・フリー"に、みんながあれほど反応してくれるなんて、正直、想像もしてなかったんだ。だって、書いてる時には、笑っちゃうくらいシンプルな曲のつもりだったからね。歌詞だって、すごくシンプルでストレートだろ? だから、あの曲ってただピュアなサウンドと、歌詞と、ビートとアレンジが一緒になったことで、インパクトが生まれたってことなんだと思うんだ。つまり、そういう、『素朴なものの中にこそ、実はものすごいパワーが隠されてる』っていうのが、僕のソングライティングにおける持論なんだけど(笑)」

●じゃあ、その"喜び"っていうのは、ある意味、曲を普遍的でタイムレスなものにする、という言い方は出来ると思いますか?

「うん、ホントその通りだと思う。誰だって、何かをするときは、それが大好きだからやるわけじゃない? 自分とレイ・デイヴィスを比較するつもりなんてないけど、『もしかしたら、アティテュードの面ではすごく似てるのかもな』って思ったりする。音楽に対して本当にものすごい情熱を持っているってこと、そして、同時に、その音楽とは人と分かち合うためのものなんだって理解しているってこと——そのポイントに関してはね。だからこそ、僕も含めて、みんなが彼の音楽にコネクト出来るんだと思う。それって本当にいいことだと思うし、僕にとってすごく励みになってるんだ。星の数ほどのバンドがいる中で、こうやってアルバムを作るチャンスをものに出来たことって……うん、本当にラッキーだと思う。例えば、ザ・ミュージックとか、ホワイト・ストライプスみたいなバンドと一緒に音楽がやれるなんて……信じられないくらいに最高のことなんだよ! 僕らにとって、こういうことはすべて神聖なことであり、本当にパワフルな経験なんだ。だから、僕には、レコード会社の人間なんかが『このバンドこそが本物だ!』なんて文句で世間へと宣言することなんて……もう、神への冒涜行為にも等

そう、今、まさに新しいジェネレーションが生まれつつあるんだ。何が起きてもおかしくない、そんな雰囲気がシーンに充満してるんだよ。中には、「"THE" バンドが流行ってるだけ」、なんて言う奴もいるけど、そんなの戯れ言さ。だって、ザ・ミュージックの音楽は本当にイカしてて、聴けば心からエキサイトするっていうのは、紛れもない事実なんだから!

しいっていうか。ああいう奴らは、金儲けのためだけに"クールに見える" 連中をすばやくゲットしてきて、それをバンドに仕立て上げるんだ。で、プロの作曲家を雇ってヒット・ソングを書かせるだけなんだよ。でも、儲かるとか儲からないとか、名声とか云々なんて、全然重要なポイントじゃないんだ。本当に大事なことは、みんなが自分自身を表現できて、誰もがそれに夢中になっていい、ってこと。だって……世の中にラヴ・ソングばっかりなくたっていいじゃない? それよりも、自分達の人生や、生きることを歌ってるアーティストの方が、ずっと聴いてて満足感が得られるはずだと思う。音楽って、限界やルールなんて無い方がずっといいんだ。っていうか、そもそもがそういう作業なんだよ。何をやったってOKな世界。それこそがアートなんだから。で、世の中には才能のあるアーティストって、山ほどいるわけでさ。そういう意味で自分達はラッキーだと思う。勿論、ザ・ミュージックも、ホワイト・ストライプスも、ザ・ストロークスも、本当に実力があって注目を集めているバンドだと思う。でも、世の中には、同じくらい実力を持ってるけど、まだ日の目を見れずにいるっていうバンドも、大勢いるんじゃないかと思うんだ。だから、それって……タイミングとか運とか、それこそ地理的なものが関係してるんだと思わない?」

●じゃあ、例えばザ・ヴァインズとザ・ミュージックは、それこそ育ってきた土地も、聴いてきた音楽もまったく違うよね。そういう中で、彼らとあなた達を結び付けるもの、あるいはこの時代における必然性みたいなものっていうのは、あなた自身はどんなものなんだと考える?

「まず、どっちも若くって情熱的だよね。それから、彼らには間違いなく才能がある。で、僕らも才能があることを願ってて(笑)……だから、うん、僕は本当に嬉しくてたまらないんだ。ザ・ミュージックと初めて会ったのはイギリスだったんだけど、会った途端に、僕はもう真っ先に、あんなアルバムを作ってくれた彼らに感謝したよ。ずーっと、ぶっ続けにあのアルバムを聴かせてもらったんだ。ホント、素晴らしい作品だと思う。だから、僕はどうしてもザ・ミュージックのメンバー全員に、お礼を言いたいって思ってたんだ」

●そうなんだ(笑)。

「そうしたら彼らも、『俺達も、ここ最近はザ・ヴァインズのCDをずっと聴いてるぜ』って。それが、僕にはホンットに嬉しくて——そう、何がエキサイティングかって、君が言う通り、まさに新しいジェネレーションが生まれつつあるってことなんだ。何が起きてもおかしくないような雰囲気が、シーン全体に充満してるんだと思う。『バンド名の頭に "THE" が付くバンドが流行ってるだけ』、なんて言う奴もいるけど、そんなの戯れ言さ。ザ・ミュージックの音楽は本当にイカしてるし、彼らの音楽を聴くと心からエキサイトしてくるんだ。それは、紛れもない事実なんだからね。それと……誰もが世の中を変えたいって願ってるよね? 僕らはそんな漠然としたものに向かってゆくほど無邪気ではないかもしれないけど、でも、音楽ビジネスの世界をまず変えてみたいとは思うようになったんだ。ただ、そこには政治的な意図っていうのは全然含まれてなくて……ただ、自分の道を行く人達のことを歌うことが出来て、で、そこに聴き手が共感を覚える、そういうことがちゃんと出来る状態にしたいっていうか」

●さっき撮ったロブとの写真が、今号では表紙になるんだよね。で、それは何故かって言ったら、やっぱりその新しいジェネレーション、新しい世代のバンドが多く登場してきた2002年を象徴するのは、ザ・ヴァインズとザ・ミュージックだろうと思ったからなんだ。

「うん、僕自身、今ってすごくエキサイティングな状況だと思ってる。ある意味、僕が2、3歳の頃と似てる状況っていうか……やっぱり、80年代に入ってからって、エキサイティングなバンドは殆ど出てこなかったと思うんだ。事実としてね。勿論、グレイトなバンドっていうのは、いつの時代にもいるんだけど——うん、でも今年の、2002年の音楽シーンって、こうなる運命だったっていう気もするんだ。世の中が常に拡張し続けてるのと同じように、音楽も常に拡張してるわけでさ。それがあるところまで達すると、何か決定的な、運命めいたものが働くっていうか……よくわかんないけど。でも、そのバンドが本物かどうかって、すぐにわかるものだろ?」

●あなた自身、2002年を振り返ってみると、これまでよりもずっとシンパシーを感じたり、共通項を感じるバンドっていうのは多かった印象はあるのかな?

「そう思うよ。確かに、ザ・ミュージックなんかとは共通点も感じるし、すごく似通ったことをやってると思う。ただ、やっぱりあくまでも別々の個性っていうか。でも、それがいいところなんだよ。そうやってお互いを補い合ってる、っていうのかな。たからこそ、僕は今の状況が、ハイプで終わらないで欲しいと思うんだ。こういう状況だからこそ、純粋に、バンドをいいか悪いかで評価して欲しいと思う。確かに、今の状況の中にいるバンドをトレンドとして見ることも可能かも知れないけど——僕は、本物だと思ってる。まあ、そのことで頭をかきむしってるような連中もいると思うけどね(笑)。ヘヴィ・メタルの連中とかさ。そういえば、この前、僕らMTVのア

僕は、あの91年みたいな変化が起こることを願ってる。僕らや、他の独創的ないいバンドが、すべて出現すれば、今の"ポップ・ミュージック"にストップがかけられるはずだと思うんだ。それが来年に起きるのか、十年後なのかはわからないよ。でも、僕はそれについて、すごく前向きに考えてる。希望は絶対にあるはずだし、そのために、僕はベストを尽したいんだ

ウォードに出ただろ？　あれって、2002年がおさらい出来るクールなイヴェントだったと思うけど、でも、アクセル・ローズだけは、ちょっといただけなかったな」
●夏には日本にも来てましたよ。
「やっぱり、どうしたってああいう連中の時代は終わったと思うんだよね。ま、よくわかんないけど。ガンズ・アンド・ローゼズは昔からあんまり好きじゃなかったから、『今になってカムバック？　やめてくれよ』って感じ。ほら、ビートルズ以来、ロック・バンドっていうのは人気商売になっちゃったじゃない？　それって勿論プラスの面もあるわけだけど、マイナスの面っていうのもあるわけでさ。僕なんかにしたら、モンキーズなんて、有害種以外の何者でもなかったりするんだよね。ロックの商業化における腐敗ってことに関しては、モンキーズから始まってるとさえ僕は思ってるんだ。まあ、あんまりこの事は言いたくないんだけど……悪口は嫌いだし」
●あ、そうそう、これって前から思ってたことなんだけど、クレイグって"嫌いな音楽"って殆どないよね。
「音楽は好きだよ」
●っていうか、「このバンドは嫌い」とか「このジャンルはダメ」とか。そういうの、ないでしょ。
「ないない。それは全然ないな。あ……ねぇ、出来ればさっきのアクセル・ローズに関する発言は、出来れば載せないでもらえるかな？　やっぱり……うん、彼の気持ちを傷つけたくないし」
●いや、あなたが、彼を傷つけようと思って言ってるとは、全然思わないよ。というか、むしろ私は、クレイグがどんな音楽にも愛情を感じることが出来る、ってことが本当にいいな、って思ってるってことなんだけど。
「ありがとう。そう、だから、僕は決して、アクセルのことが嫌いだって言いたかったわけじゃなくて——」
●うん、わかってるよ（笑）。実際に、苦手な音楽ってある？　「こういうタイプ」ってことでもいいんだけど。
「んー……ジャズは嫌いかも。まあ、自分じゃそれほど詳しく分析は出来てないけどね。ただ、昔からずっとキンクスみたいな音楽ばっかり聴いてきた、っていうことは確かなんだ。つまり、ストーリーテリング・タイプっていうかさ。だから、僕にとって一番のお気に入りの楽器って、ヴォーカルなんだ。声って、ものすごくパワフルな楽器だと思うんだ。とにかく、僕は『あのバンドは下らない』とか、『ひどい代物だ、すぐに止めるべきだ』とかいか、『音楽センスがゼロ』なんて言うこと自体が好きじゃないんだよ。だって、自分自身が本当にいろんな音楽が好きだから。デペッシュ・モードも好きだし、ニルヴァーナも好きだし、ケミカル・ブラザーズもスーパーグラスも大好きだし。スタイルなんて重要じゃないんだ。大切なのは、自分がそのバンドのプレイヤー、音楽、メッセージに対してどう感じるのかってことだから。それに、音楽って本質的にいいものだと思うし、人を癒してくれるものだろ？　精神的な存在、宗教的なものにもなりうるわけだから。僕にとっても、そういう存在だしね」
●うん。ただ、一方で私なんかは、「私はザ・ヴァインズがすごく好きだし、自分にとってとても意味がある音楽だ。でも、だからこそニュー・ファウンド・グローリーにはノーと言いたいし、それをちゃんと言葉にすべきだ」とも思ってしまうんですよね。
「例えば、僕にしたってニュー・ファウンド・グローリーに対して、ザ・ミュージックと同じ気持ちを持つことは出来ないよ。そういう共感を感じることは出来ない。ただ、僕自身が考えるのは……一つにはアメリカの音楽と、イギリスの音楽は根本的に違うってこと。で、オーストラリアの音楽っていうのは、その双方が組み合わさったものなんだと思う。で、ザ・ヴァインズの場合は、よりイギリス寄りのサウンドなんだよね。だから、僕はよりザ・ミュージックの方にシンパサイズするんだと思う。ただ、一方の事実として、ニュー・ファウンド・グローリーみたいなバンドがあってこそ、ザ・ストロークスみたいなバンドが存在してるとも言えるはずんだ。ザ・ストロークスが、より"いい"バンドになってるってこと。とは言っても、僕はニュー・ファウンド・グローリーの音楽すら聴いたことないんだけど（笑）。きっと人間的にはいい人達なんだろうなぁとは思うけど、僕が聴くタイプの音楽では決してないからね。ほら、例えば、僕なんかはミューズがすっごく好きだろ？　エモーショナルで、ディープで……あ、レディオヘッドなんかも、すごく"濃い"っていうかさ。探求とアートのために音楽をやってるバンドが、僕は本当に好きなんだ。ステージで飛び跳ねることだけが目的じゃないバンドがね。でも、アメリカって、その手のバンドがほとんどじゃない？いわゆる"パンク・ミュージック"って呼ばれてる連中だけど、僕にしたらあれってパンクなんかじゃなくて、それこそ"ポップ・ミュージック"だと思うんだよね」
●実は、前号の『スヌーザー』の特集は「激動の91年」だったんだけど——91年という年は、グランジ／オルタナティヴ・ミュージックという新しい音楽が生まれたことで、前時代的な流行りの音楽も、業界のシステムも、ティーンエイジャーの価値観も、すべてが更新された年だったと言えますよね。そんな大きな動きが、もしかしたら、また再び起ころうとしているんじゃないか、という期待を2002年のシーンを見ていたリスナーが感じていたとしたら、あなたはどう思う？
「それって、僕ら自身も望んでることなんだよ。90年代初頭にああいうことが起きたのって……僕も、すごくいいことだったと思ってるしね。やっぱり、ニルヴァーナの出現は凄かったわけだからさ。本当に詩的だったし、アーティスティックなバンドの登場だったわけだから、本当に衝撃的だったんだ。それまでの、例えばポイズンみたいなバンドは、あんまり深みがなくって、女と車のことしか歌ってなくって……勿論、だからこそ彼らの音楽が好きなんだ、って人はたくさんいたんだと思うよ。いまだに、ああいう音楽を愛聴してる人は、必ずいると思うし。でも、僕としては、あの91年みたいな変化が起こることを願ってるんだ。ザ・ヴァインズも、他のどのバンドも、独創的ないいバンドがすべて……そういうバンドが出現すれば、音楽業界全体に、世界規模の影響を及ぼすことが出来るはずだと思うんだよ。うん、それについて、僕はすごく前向きに考えてる。ベストを尽くしたいんだ。この先に何が起こるのかはわからないけど、希望は絶対にあるはずだと思うんだ。僕個人は"ポップ・ミュージック"ってものを一切信じてないんだけど……今、いろんなバンドが登場することで、その"ポップ・ミュージック"にストップがかけられるなら嬉しいと思うんだ」
●それってつまり、ポップ・ミュージックというよりは、それを生み出すシステムの話だよね？
「そう、バンドやグループを機械的に濫造するシステム、ってこと。そういうシステムの下では、すべてが形式化されるものだから。例えば、可愛い女の子達とハンサムな男の子達をくっつけて歌わせれば、小さい子供には受けること間違いなしって感じでね。それはそれで別に構わないんだよ。でも、僕に言わせれば、それって音楽をやることの目的を無くしてしまう行為なんだ。で、さっきもモンキーズの名前を出したけど……そういう仕組みが明らかに行われるようになったのが、あのバンドからだと思うんだ。もしかしたら、モンキーズのメンバー本人達は悪い人じゃなかったのかも知れないけど……僕は絶対にモンキーズを考案した人間は悪い人だと思う。あ、君がファンだったら申し訳ないんだけど（笑）」
●いや、大丈夫だけど（笑）。でも、そういう対システムに対する自分達の役割にはすごく自覚的なんだ。
「やっぱり、そういうシステムの崩壊する瞬間に、自分達も立ち会えたら最高だとは思う。勿論、端から見たら僕らだって機械的に濫造されたバンドの一つに見える可能性だってあると思う。でも、それって本当に、絶対的な間違いなんだ。だからこそ、次のアルバムでは大きな成長を見せたいと思ってるんだ。純粋にエキサイティングで、可能な限りハッピーで、喜びに満ちたアルバムに仕上げる、っていう意味においてね。そう、僕は、音楽に何かを還したい、貢献したい。『これが僕らの人生で、これが僕らがいつも聴いたり弾いたりしてる音楽なんだ』って、みんなに伝えたいっていうかさ。それこそがバンドってものなんじゃないのかな？　だって、自分達の音楽に夢中になってくれる人がいなかったら、バンドとして存在できないわけじゃない？　『あのCD、すごく良かったよ』とか『あの曲、最高だね』って言ってもらえると、僕は本当に幸せな気持ちになることが出来るし……最高の褒め言葉をもらった、って思う。だから、そう、僕はこの音楽って言うアートフォームに関わる、すべてのことを愛してるんだ。そのすべてが大好きなんだよ——うん、飛行機での移動は除いてね（笑）」 S

THE MUSIC

by SOICHIRO TANAKA　photography by KEETJA ALLARD

続いては、新世代バンドのもうひとつの代表格、ザ・ミュージック。ヴァインズのサポートとして、ようやくアメリカ進出に乗りだしたばかりの彼らですが、本国イギリスと日本では破格の成功を収め、その活躍はまさに2002年の象徴的出来事でした。もはやエッジの鈍ったオアシスに固執しても仕方ないし、アイドル・ポップやラップ・メタル、バブルガム・パンクは、もうたくさん――そんな気持ちにジャスト・フィットしたのが、彼らザ・ミュージックの、無鉄砲なブッ飛びサウンドだったのです。年末の来日公演は、その直前の全米ツアーの疲労もあって、日によっては、本調子ではないギグもありましたが、何のその。さまざまな経験を経て、明らかに成長し、ちょっとした風格さえ漂わせ出した、ロブの最新語録をどうぞ。ドゥ・ザ・タコ踊り!

――――――interview with ROBERT HARVEY

●アメリカでは、クレイグと一緒の撮影とか、いろいろありがとう。

「ノー・プロブレム!」

●クレイグは、本当にあなた達のファンだから、本当にあの撮影を喜んでくれたんだよね。

「うん、知ってる。そうなんだよね」

●でも、あなた達は最初、そんなには彼らヴァインズに対して興味はなかったでしょ?

「うん、実際、あんまり知らなかった。でも、今回のツアーでホント仲良くなったんだよ。実際、クレイグとはすぐにコネクト出来たし。ホントびっくりするぐらい、いい奴なんだよね。それに、僕ら、彼らの曲にもすぐに夢中になった。だって、ライヴを観たら、ホントにすごかったからね! 想像以上だったよ。僕ら全員、マジでびっくりしちゃったんだ」

●(笑)ところで、つい最近まで、あなた達はリーズっていう小さな街に暮らしてた。で、ここ1年くらいでアメリカや、いろんな都市に行って。何かこう、すごく自分と違うものを発見した、とかはありますか?

「うん、ほんっとたくさんある。だって、僕は小さい頃、全然、外に出なかったんだ。ずっと家にいた。そういう子供だったんだ。いつだって、どこでも安全だって感じられるところにいたんだよ。っていうのも、あんまり自信がなくて――自分自身にね。で、こういうことをやるようになって、より自信がついたし、そのおかげで、だんだん今の自分になっていった。だから、僕としては、もうそれだけで十分っていうか、それ以上だよね(笑)。こういうことをやれるチャンスが与えられて、ほんとに感謝してるし、うれしいと思ってる」

●じゃあ、アメリカに対して、あなた達が行く前に想像してたものと、実際に行ったところでは、ギャップとかはありました?

「うん、そうだね。そういうところもあったね。まあ、LAは……かなりいいところなんだけど、全部がプラスティックなんだよね。NYは好きだったな。でも、僕らが行った他の場所はどこも、かなりダークで陰気で、静かだった。僕さ、実際に行くまでは、アメリカって、ビルでいっぱいだと思ってたんだよ(笑)。でも、そんな場所は二つしかなかった。一つはNYで、ニュージャージーもちょっとそうだったけど。あとはシカゴ、フィラデルフィア……ボストンはすごく気に入ったんだ」

●ボストンは、ヨーロッパに近いですよね。

「うん。ボストンはすごく良かった。あ、でも、LAもかなり気に入ったよ。ヴェニス・ビーチに泊まってたから、すごくきれいな場所で。ま、ちょっとプラスティックなんだけど」

●そう、一般的にアメリカってすごくキレイで、夢のある国って思われてたりするけど、例えば、アメリカのバンド、スマッシング・パンプキンズとか、ジェーンズ・アディクションのようなバンドは、そうした表面的な美しさとかプラスティックなものの奥にある、すごくゴシックで、ダークな部分を表現していたりする。

「うん、その通り。そうだね。で、どっちのバンドもグレイトだし……ジェーンズ・アディクション、特に、スマッシング・パンプキンズは、そこを表現するのがうまいよね。そう、アメリカには、思われてるよりいろんな部分がある。すごく混乱した場所だと思うな。勿論、いい人達にも大勢会ったし、そこでシェア出来るものもたくさんあったんだけど、僕には理解出来ないこともたくさんあるんだ。例えば、銃の法律とか。だろ? あれはあんまりいい考えじゃない」

若い時って、ナイーヴで、時には年上の人達には理解出来ない馬鹿馬鹿しい考えを持ってたりする。でも、ナイーヴな人達がいるのは、いいことだと僕は思うんだ。だって、何がうまくいくかとか、自分に何が出来るかとか、よくわかってないっていうのは、そのおかげで、新しいことが始められるしマッドネスを作り出せるし、その後も、決して忘れられないようなすごい時間を過ごせるんだ。だろ?

●ノーマン・クックなんかはすごく現実的で、「自分の音楽をブッシュは聴かないし、政治家の気持ちなんて変えない。ただ音楽は一晩の間だけ、人々のシェルターになれる。その中で人々は、抱き合い、愛し合うことを覚えるかもしれない。音楽が出来ることは、そのぐらいのことなんだ」なんて視点を持っている。

「うん」

●じゃあ、あなた達の音楽、あるいは、あなた自身の視点っていうのはどうですか?

「僕は、自分のことをミュージシャンだとは思ってないんだ。"ただ音楽をプレイする人間"だと思ってる。わかるかな? それが僕に出来ることだから、ある人に『やるべきだよ』って言われて。『君がミュージシャンになりたくなくても、僕が君に世界でやって欲しいんだ』ってね。だから、そこで僕がやりたい、と思った方がすごいっていうか。でも僕は、それが何であれ、世界を変えられると思う。何でも。ただ、信じるかどうかが、重要なんだ。それに対して、行動を起こそうとするかどうか。今って、大勢の人が、まあ、ハッピーだよね。ファットボーイ・スリムが言う、シェルターっていうか。それは『もう遅すぎる、何も良くならない』と思ってる人達のためのシェルターなんだ。でも僕は、どっちかと言うとプライマル・スクリームの言ってることの方に近い。人は、何だって出来る——それを信じていさえすればね。僕はそう固く信じてる。そう、ジャー、ラスタファリアンの世界は、全員がジョイントした世界なんだ。そこで人は、何らかの答えを見つけるんだ。でも……音楽は絶対、世界を変える。すべて信じることが問題なんだ」

●今、ラスタファリアンの話が出たけど、あなたはアティテュードとしてもサウンドとしても、レゲエ・ミュージックからの影響はあるんですか?

「うーん……聴くといい気分になるよ。宗教としてのラスタファリアンには詳しくないけど。でも、意味は通じるんだよね。うん、レゲエ・ミュージックはよく聴く。でも、あんまり影響は受けてないと思うし、精神的な影響はまったくないんじゃないかな」

●もうひとつ、レゲエやラフタファリアンには、マリファナはつきものだよね。世の中には、ドラッグでブッ飛ぶことを否定的に感じる人もいるけど、僕自身は、本人がある程度のことをきちんと理解しているのならば、それは許されることだと思う。実際、現実以外の可能性を知るのはすごく有益だと思う。あなた自身は、ドラッグ全般に対して、どんな考え方を持っているんでしょう?

「基本的には、誰でもやりたいことをやってみるのが間違ってるとはまったく思わないんだ。ドラッグに関して言うと、居心地のいい環境に囲まれてればいいんじゃないかな。別にドラッグを勧めてるわけじゃないよ。僕は時々アルコールは飲むけど、何も吸わないし、何もやらない。でも、やりたくなる気持ちは理解出来るんだ。それって完全に、個人的なことなんだよ。勿論、僕もドラッグをやったり吸ったりしたことはあるけど、それは信用出来る友達と一緒にやった。現実から離れるっていう、すごい体験をしたんだ。ただドラッグが効いてる時って、すごくヘンな感じなんだよ。多分、それが、今、アパシー(無関心)を大きくしてると思う。悲しいよね。で、僕は吸ってみる選択をし、やめる選択をした。っていうのも、ある時はいい気分になれるんだけど、嫌な気分になることも多かったんだ。ドラッグによって知性を高められる、って言う人もいるけど、僕はそうは思わないな。たださっきも言ったけど、ちゃんとした人達に囲まれてる時に、自分でちゃんと考えてやるなら構わない。でも僕は、ハード・ドラッグにはまったく近寄らなかった。近付きたくないしね」

●じゃあ、次は、さっきのマネーについて訊きたい。ここ10年、特にアメリカのレコード会社には、他業界からの巨大な資本が入ってきて、音楽と関係ない力が動くようになってきた。そのせいもあって、実際、現場で音楽を作っている人達がすごくやりにくくなってきてる。そういうものを肌で感じることはありますか?

「うん。感じる。すっごく感じるよ。ある意味、ビジネスの世界になっちゃったんだよね。音楽に意味がなくなった。っていうのも、ソウルフルで意味のある、本物の音楽がなくなったから、誰もそんなこと気にかけなくなってしまったんだ。イギリスには『ポップ・アイドル』っていうのがいてさ。あれは……はぁ(ため息)。ほんっと最悪で、ひどいんだ! でも、儲かるから、そういうのをやりたがる連中が大勢いる。金のために、スターになりたがるんだよ。で、レコード・レーベルも手軽に金になるから、やりたがる。ドカンと儲かるから。最悪だよ……。うん、キッズには、信じられるものがもう何もないんだ。僕が思うに、子供やティーンエイジャーっていうのは、世界の未来を背負ってるわけだよね? だから僕は、確実にいい手本を見せたい、って思うんだ。なのに、誰もそれをやらない。その代わり、彼らに残されるのは、僕らが今作ってるメチャクチャな状態なんだ。僕に子供が出来たら……出来るかどうか、欲しいかどうかさえわかんないけど(笑)。ほんとメチャクチャだからね。それでも、新しい人間を作り出す、って考えには惹かれる。まあ、ま

金、宗教、戦争 —— その三つが、もうすぐ世界を終わらせると思う。僕はヒッピーじゃない。
でも、最近は、自然を愛したり、戦争に反対したりすると、「あいつはヒッピーだ」って言うんだ。
人と人がお互いうまくやっていくことなんて、花が育つのと同じくらい自然で、人生の一部なんだ。
でも、戦争は人生の一部じゃない。人が死んでいくのは人生の一部だけどね。人殺しは違う

だだけどね（笑）。もうしばらくしないと（笑）」

●僕らはあなた達をのことがすごく好きだし、ザ・コーラルもすごく好きだし、ザ・ヴァインズもそうなんだけど、それぞれの業界との距離を見てると、それぞれがやっぱり違ってるんだよね。ザ・コーラルなんかは今回のアルバムが売れたのが、かえって「困ったな。レコード作りに専念出来ないな」って感じで、ひたすら業界の喧騒から姿をくらまそうとしている。で、逆に、クレイグなんかは、すごく業界に利用されてる感じがして、見ていてハラハラするし、すごく心が痛む。

「ああ……」

●その中で、あなた達というのは、とてもバランスがいいように映る。今後もそのバランスを失わずに、二つの真ん中をスコーンと抜けていけると思いますか?

「そうなればいいと思ってるよ。そうしたい。でも、今、君が言ったようなことが起きる理由って、周りにリアルな音楽があまりに少なすぎるからなんだ。だから、ヴァインズみたいな、誰もがびっくりするようなバンドが出てくると、みんなが飛び付くんだ。特に、クレイグなんか、本当に素晴らしいライターだし、すごいバンドだよね。で、他に何もないから、彼みたいな人は、すごく高いところに持ち上げられちゃうんだ。目立つところに。でも、そうなると、下りてくるのが大変でさ……。ザ・コーラルもすごいバンドだ。幸運にも、僕らはその両方と一緒にプレイして、友達になったんだけど、両方グレイトな連中なんだ。だからこそ、近いうちに、僕は『ソウルと意味が、音楽に戻ってくる』って思うんだよ。で、僕らが今いるポジションは、人が僕らに気付くだけのことをやってる、っていうか。それで十分だし、みんなが僕らの音楽を聴いて、楽しめるだけのことをやってる。僕はみんなに顔を知られたりしたくないし、誰かの上に立ちたいとも思わない。ただ普通の人間だからね。ほんと、なんで君達が僕にインタヴューしたいのかさえわかんないんだ。普通なのに。だから……ただ、これからもずっと音楽に集中したいだけで。こうやって話すのは好きだけどね。なんか、ほめられてるみたいだから」

●（笑）ただ、こうやって成功が続くと、ずっとツアーに出ることになるし、そうなると、なかなかレコードが作れなくて、フラストレーションがたまったりするんじゃないかとも思うんだけど、そんなことはない?

「でも、ツアーって、僕達がこれをやってる理由の一つだからね。僕はプレイしてる時に、みんなの顔を見るのが好きなんだ。好かれてても、嫌われてても。アメリカでプレイした時は、オーディエンスの反応がいろいろでさ。盛り上がってくれた人達も大勢いたし、そうじゃない人達もいた。でも、どっちにしても、僕はステージから下りる時、『サンキュー』って言ったんだ。でも、一人突っ掛かってきた男がいて。そんなことされてうれしい、とは言えないけど（笑）。でも、気にはならなかった。『もっと攻撃的にやろう』って気にさえなったな。でも、大勢の人達をハッピーにしたことが自分でわかってるから、影響は受けなかった。いつかはあの男も大人になるかもしれないね。だって、バンドが嫌いだからって、あんなことする必要ないじゃん? 会場の後ろの方で一杯やって、友達としゃべってればいい。僕に向かって中指を立てる必要はないんだ」

●じゃあ、最後に一つだけ。あなた達が、「こんな最高のアルバムを作りたい」と思えるような、既存のクラシック・ロック・アルバムを3枚ほど挙げてください。

「ヒューッ（口笛）。まずは、プライマル・スクリームの『スクリーマデリカ』。あれはものすごいアルバムだよ。それから、ジェーンズ・アディクションの『ナッシング・イズ・ショッキング』。あのさ、4枚挙げてもいい?」

●勿論（笑）。

「レフトフィールドの『レフティズム』。それから、ザ・ドアーズの『モリソン・ホテル』」

●ああ、でも、ほんとに面白いね。その4つのアルバムから、あなた達は確実に、いろんなエレメントを継承してる。それぞれが持ってないミクスチャーがあるし。

「クール!（笑）」

●アメリカでは、あなた達とジェーンズ・アディクションの繋がりみたいなものって、感じられたりするのかな。

「ジェーンズ・アディクションは僕、半年くらい前に聴き始めたばっかりなんだ。すごいバンドだよね。でも、大勢の人に『ペリー・ファレルによく似てるね』って言われて。最初にそう言われた時って、僕、『誰? ペリー・ファレル?』って感じでさ（笑）。ペリー・ファレルを知らなかったんだ。で、そのまま外に出て、ペリー・ファレルをチェックするのにレコードを買って。かけてみたら『ふぇーっ!』ってなった。だから、みんながそう思うのって、すごくうれしいんだ。それからは、何百回も聴いてる。ドアーズは……僕ら、3年くらい聴いてるかな。僕のフェイヴァリット・バンドなんだ。プライマル・スクリームもずっと好き。14歳くらいの時からね」

●オーケー。じゃあ、あなた達が、リンプ・ビズキットやリンキン・パークを蹴散らしてくれることを期待しています。

「（笑）僕も。はははは」

S

ホワイト・ストライプスなんかの曲をラジオで聴くのって、ファッキン・グレイトなんだよ! 生々しくってさ。彼らは“人”が作った音楽をみんなに聴かせて、エキサイトさせてるんだ。プロデューサーやスタジオ・ミュージシャンが作ったんじゃない、“バンド”が作った音楽をね。そして、そんな本物のバンド、本物の音楽を、みんなが認めつつあるってことが重要なんだ

個人として、どんな方向を選んでもいい、ってところだと思う。間違った方向なんてないんだよ。つまり、それは個人の問題で、その人が選べばいいことなんだ。個人的な理由で、インディペンデントでしかやりたくない、独力でやりたい、出来るだけ自分の倫理観に従いたい——って決めるんなら、それはグレイトだし。つまり、宣教師になったって、バーテンダーになるのだって間違ってないと俺は思う。『自分はこれをするんだ、こういうふうにするんだ』っていうのを選んで、それをちゃんとやるなら、グレイトなんだ。どっちがいい、ってことじゃないと思うんだよ。イアン・マッケイでいることが、J・ロビンスでいることよりいいとは思わないし、逆もそう。リトル・リチャードでいることが、ファッキン・ブリトニー・スピアーズでいることより素晴らしいとは俺は思わない。いい音楽を作ること、それが一番重要なんだよ。ほんとに純粋な理由で、ハートから音楽を作ってれば、それでいいんだ! もしそれが、地下室で音楽を作って、1000枚しかレコードをプレスしないことを意味しても、ハートから出て来てるなら糞グレイトじゃないか。何百万枚もレコードを売って、何百万ドルも儲けることを意味してても、心から生まれてるなら糞グレイトなんだよ。俺にとっては、人が考える“パンク・ロックの政治性”って、時々うんざりさせられるっていうか。だって、俺は誰かに『こう生きろ』なんて言わないし、誰にも言われたくない。俺はただ、外に出て、自分のやることをやって、誰も傷つけずに、自分の友達や家族が『愛されてる』って感じてほしいし、ハッピーになってほしい。俺にとって重要なのはそれだけなんだ。俺がメジャー・レーベルにいるか、インディペンデント・レーベルにいるかなんて、ほんとどうでもいいんだよ。うん、スクリームで俺が本当に愛してたのは、他のどんなハードコア・パンク・ロック・バンドよりも“ロックンロール”だったところだった。D.C.のパンク・バンドのほとんどは、絶対に“グリーン・アイド・レディ”(70年代のAMポップ・バンド、シュガーローフのヒット・ソング)とか“マジック・カーペット・ライド”みたいな曲はプレイしないんだ。絶対やろうとしない。でもスクリームがクールだったのは、そんなことどうでもいいところだった。『自分達がハッピーなら、やる』ってアティテュードがあったんだ。『ロックンロールをやるならロックンロールをやってやろう、パンク・ロックをやるならパンク・ロックをやってやろう』ってね。レゲエだってやればやったと思うし、他の連中がどう考えようと関係なかった。俺にとってはそれこそが、もっともパンク・ロックな姿勢だったんだ。だろ? 個人として、やりたいことを本当にやる——どんなルールやトレンドにも従わずにね。本当に、他の誰かがどう考えるかなんて心配しないことこそが、一番大切だと俺は思う」

●では、あなたにとって、いまだに“ヒーロー”と呼ぶにふさわしい存在がいるとしたら、それは誰なんでしょうか?

「うーん……俺にとってのヒーローは何人もいるけど、誰も名前を聞いたことがないだろうな。すごく親しい、個人的な友達だから。でも、俺のヒーローでたぶん一番ポピュラーなのは、ニール・ヤングみたいな人だと思う。ニール・ヤングって他の誰よりも、音楽的遺産、音楽的な真っ当さを保持してるだろ? ボブ・ディランよりも、ポール・マッカートニーよりも、ローリング・ストーンズよりも。他のどんなミュージシャンより……イアン・マッケイよりも守ってる。だって、ニール・ヤングが今も持ってる誠実さって、誰にも否定出来ないようなもので。それに、グレイトな男だしね。彼には愛する家族がいて、すごくシンプルなやり方で人生を楽しんでる。そして、ビューティフルな音楽を作ってるんだ。大切なのはそれだから」

●なるほど。では、2002年は、ザ・ストロークス、ザ・ヴァインズ、ザ・ハイヴスといった、いわゆる“THE”バンドが大いに活躍した年でした。あなたもザ・ハイヴスのコスチュームを着てパロディにしてたりしたけれど、ああいった一連のバンド達を、あなた自身、どんな風に見ていたのでしょうか?

「うーん……全部、ほんとにいいと思うよ。ハイヴスはファッキン・ロック・バンドだと思うし、ライヴがものすごい。ストロークスはほんとにいいレコードを作ったし、ホワイト・ストライプスのアルバムにはびっくりした。ジャック・ホワイトはこの10年、15年でベストの曲を書いてるね。フランク・ブラックみたいなソングライターに匹敵する。ものすごく歌詞がよくて、シンプルなメロディで。うん、どのバンドもグレイトだよ。ああいうバンドがシンプルなロック・ミュージックをやってて、注目され出してるのは素晴らしいことだと思う。だって、今じゃ……あまりにも、商業的なポップ・ミュージック、ポップ・ロックの派手なところにばっかりフォーカスされてて。いわゆる“パンク・バンド”って呼ばれてる新バンドでさえ、商業的に駆り立てられてるんだ。ぱっと見りゃわかるだろ? 連中のイメージって、すっごくクリーンでさ。ものすごくイメージを意識してる感じで……俺にはなんか笑えるっていうか。だから、ホワイト・ストライプスの曲とかをラジオで聴くと、ファッキン・グレイトなんだ! ほんっと生々しくってね。他のオルタナティヴ・バンドとかなんとか呼ばれてるような連中のハイテク・プロダクションには全然当てはまらない。うん、本物のロック・バンドが注目され始めてるのはグレイトだと思うし、彼らは“人”が作った音楽をみんなに聴かせて、エキサイトさせてるんだ。プロデューサーが作った音楽じゃなく、スタジオ・ミュージシャンが作った音楽でもなく、バンドが作った音楽なんだよ。みんなが本物のバンドや本物の音楽を認めつつある、ってところが重要だと俺は思う」

●例えば、私などはザ・ヴァインズが非常に、非常に大好きだったりするんですが、「ニルヴァーナの子供達」とも言われている彼らの音楽は聴きましたか? あなたが思う、彼らがニルヴァーナから受け継いだ部分、そして、まだまだ勉強すべき部分とはどんなものでしょう?

「ヴァインズがやってることは本当にシンプルだと思うんだ。で、ニルヴァーナがやってたことも本当にシンプルだった。ただギターとベースがあって、シンプルなメロディで、ドラムスがあって。それだけ。でも俺には、他のバンドを聴いて、『これってまるっきりニルヴァーナだな!』なんて言いにくいんだよ。実際、まんまニルヴァーナみたいな音を出すバンドなんて一つもないと思うし。『ニルヴァーナのサウンドに影響を受けてるかな』って思うようなバンドはあるかもしれないよ。でも……俺達だって、他の10のバンドのサウンドに影響されてたんだから! ピクシーズに影響されてたし、ハスカー・ドゥに影響されてたし、スミザリーンズなんかに影響されてた。俺達が受けてた影響なんて、モロだっただろ? 実際、『ピクシーズが大好きだ』『ハスカー・ドゥがものすごく好きだ』って言ってたし。ヴァインズのレコードは聴いたんだけど、一つははっきり覚えてるのは……うん、すごくビューティフルな曲だよね。ロック・ソングじゃなくて、ちょっとメロウで。俺にとってはあっちの方が興味があるっていうか、チャンレンジングだと思うね。ラジオで流れてる方はすごくシンプルだから。ただ叫んで、楽器を壊したりする以上のポテンシャルが、あのバンドにはあると思うな」

●「実は、デイヴ・グロールはザ・ダットサンズのことがあんまり好きじゃないらしい」という裏情報は本当ですか?

「いや、ダットサンズは好きだよ。いいんじゃない?」

●いや、もしそうなら、「デイヴ・グロールが大プッシュするバンド、ダットサンズ!」という状況は、あなたにとってちょっと困ったことになってるのかな、って。

「まあ、何でか知らないけど、俺が好きなバンドが何かっていうのをみんな気にするんだよな。そんなのどうでもいいんだ! だって、俺はエース・オブ・ベースが好きなんだよ? クリスティーナ・アギレラのニュー・シングルだって好きだし。で、実際のところ、どっかで誰かが俺にCDをくれて、『ダットサンズはどうだ?』って訊いてきたんだよ。で、『ああ、かなりクールだな!』って言ったかもしれない。そしたら突然、『ダットサンズは世界一のファッキン・バンドだ——デイヴ・グロール語る!!』ってことになっちゃってさ(笑)。うん、でもいいバンドだとは思うよ。ライヴも観て、クールだと思ったしね」

●(笑)では、話題を変えて。音楽史を振り返ると、ある不思議な周期があったりします。まずは1955年にロックンロールが生まれます。その12年後の67年には、西海岸を中心としてサマー・オブ・ラヴが起き、そのまた12年後の79年には、NYとロンドンを中心としてパン

インターネットとデジタル・ダウンロードで、もっと大勢の人が流通に関われるはずだよ。そうなれば、みんなが自分の手に音楽を取り戻す時代になると思うんだよね。そろそろ、音楽を消耗品として、商品として考える時代が終わっていい頃だと思う。音楽はヒューマンなものなんだ、何よりも、聴かれるために在るものなんだ、ってね

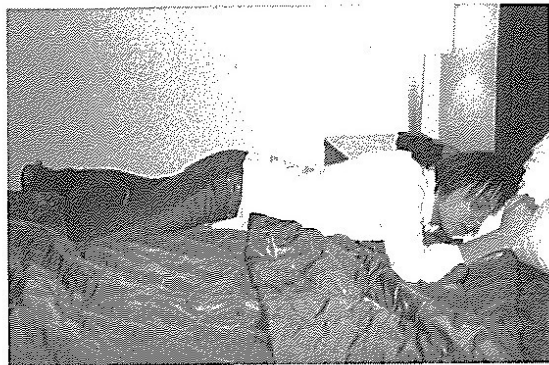
ク／ニューウェイヴというロックとは別のサウンドとアティテュードが生まれました。そして、そのまた12年後の91年、サーストン・ムーアいわく「パンクがブレイクした年」には、あなたも当事者であったグランジ、もしくはオルタナティヴと呼ばれる音楽が世界中に飛び火しました。と考えると、2003年は、その12年周期の新たな年に当たるわけですが――この周期説が更新される予感は、あなたの中にもどこかしらあったりするのでしょうか?

「うーん、でもそれって誰にも分からないことだからさ（笑）。ただ、今の音楽業界の状態はほんと最悪でね。っていうのも、ここ10年、12年の間に起きたことっていうのは――すごくたくさんのバンドがメジャー・レーベルと契約して、必然的に音楽のクオリティが低下していった。うん、自分がティーンエイジャーだった頃を思い出すと、"ミュージシャンとして成功すること" なんて選択肢にまったくなかったんだよ。単にそんなのファンタジーで、現実的じゃなかった。つまり、音楽を作りたいから、音楽を作ってただけなんだ。そこにやりがいがあった。ツアーに出たら、友達6人と一緒のヴァンに乗って、毎晩車の中で寝て。『もしかしたらガソリン代くらいは出るかもしれない』ってね。でもここ10年くらいの間に、"バンドをやること" がキャリアとしての選択肢みたいになった。『高校を卒業したら、僕はバンドを始めて、デモを作ろうと思ってます。それで何度かライヴをやって、レコード会社にアピールして、契約して、金をもらって、ツアーに出て、ビデオも作りたいですね』ってね。それだけなんだ。俺が思うに、音楽業界は "ネクスト・ビッグ・シング" とやらを見つけるのに、金を使い過ぎてるんだよ。それに必死になりすぎて、業界そのものを壊してる。ラジオなんて付けたら、ガッカリするだろ？　耳に入ってくる音楽が、全部同じだからね。どれも同じプロダクションに聞こえるし、ジャンルなんて2つとか3つしかない。『これは南カリフォルニアのパンク・ロックです。これはちょっとグランジです。で、これがポップ・ミュージック』って感じ。マジな話、糞プラスティックなんだよ。あれには失望させられる。でも、そうやってメジャー・レーベルのレコード会社がシーンの状況を酷くした後には、結果として小さいインディペンデント・レーベルがたくさん残ると思うんだ――俺の考えではね。小規模な予算で生き抜いて、ただ楽しんでやるようなバンドが残っていくと思う。例えば俺が自分のレーベルを始めることを考えた時に、バンドにはこう言うと思う――『俺は100万ドル渡したりは出来ない。でもこれだけは渡せるし、グレイトなレコードは作れる。手早く、チープにね。それをこれから5年、毎年やることは出来る。それでどうだ?』って。だから……うん、今の状態は、いくつか輝ける希望の星が出てきた、ってところじゃないかな。クイーンズ・オブ・ザ・ストーン・エイジとか、ザ・ハイヴスとか、ザ・ストロークス、ホワイト・ストライプス。マイ・モーニング・ジャケットやコールドプレイみたいなのがね。これからの10年間に、音楽をピースフルに受け継いでいけるバンドが大勢出てきたと思う。そうなったら、今溢れかえってる糞みたいなのも消えてくだろうし。特にインターネットとデジタル・ダウンロードで、もっと大勢の人間が流通に関わっていけるんじゃないかな。自分で音楽をディストリビュート出来るようになる――それって、メジャーな業界にとってはものすごい脅威でさ。でもある意味、すごくいいことなんだ。そうなれば、みんなが自分の手に音楽を取り戻す時代になると思うから。そろそろ、音楽を消耗品として、商品として考える時代が終わっていい頃だし、音楽をヒューマンなものとして考え始めていい頃だ。『君にも出来るんだ』ってね。天才でなくても、科学者でなくても、魔法使いでなくても、バンドに入って、ただやればいいんだよ。鉛筆を取り上げて風景を描き始めるのと同じように、ただ楽器を手にして、曲をプレイすればいい。それを自分の力で世界に流通させられれば、そんなにすごいことはないからね!　それが犯罪であるべきじゃない。贅沢な楽しみであるべきなんだ。だって……音楽は聴かれるためにあるんだから（笑）」

●うん、確かに。では、ちょっと音楽の話から離れて。先日の、アメリカ議会の中間選挙の結果については、どう感じましたか?

「まあ変なのは……はぁ（ため息）。ブッシュがある意味、正当に選ばれてないことは誰でも知ってるよな。あの大統領選は、求められてるほどにクリーンじゃなかった。俺自身は共和党じゃなくて、民主党だと思ってるんだけど……ああいうことが起きたのには心底失望したんだ。この10年間のアメリカ一般について俺ががっかりするのは、"強く寡黙な人間" みたいなタイプがいなくなったことなんだ。誰も敗北を受け入れられないし、誰も優雅に道を譲れない。文句を付けて、人のせいにして……そんなのばっかりさ。今、いい言葉が思い付かないんだけど、アメリカ人ってのは基本的に……情けないプッシーの集団になったんだ。すぐに訴訟を起こして、自分の問題を他の何かのせいにして。うん、ブッシュが選ばれたことは確実に、その後の問題の引き金だったと思う。そして不幸なことに、"9.11" みたいなひどい事態が起きた。もし別の大統領だったら、民主党の大統領だったとしたら、どうあのシチュエーションに対処したか、俺にはわからないけど……国全体があの時ブッシュを支持したのは、本当に一致団結する必要があったんだと思う。気持ちを強く持つ必要があった。"9.11" みたいなことから立ち直って、癒されるにはね。でもあの日以降起きたことで、興味深いのは……最初はみんなが一つになって、人間として手を繋いだんだよ。実際、家の外に出て、喋ったこともない近所の人と会話をしたり、会ったこともない通り掛かりの人と言葉を交わしたりするのはグレイトなフィーリングだった。ほんとに、みんな、気持ちが一つになったんだ。でも、それがいつしか、人間の基本的なコネクションから、もっと愛国的で国旗を振るような挙国一致にすり替わった。"人であること" じゃなく、"アメリカ人であること" になったっていうか。ナショナリスティックな "アメリカ人としての誇り" が前面に出てきてね。なんか、それがちょっとコントロール出来ないところまでいった気がするんだ。だって、"9.11" みたいなことの後で、何を一番望むかっていったら、平和だろ?　必ずしも戦争や復讐を望んだりしない。この国の人の大半が感じてるのはそれだと俺は思う。アメリカ人のほとんどは、戦争じゃなく平和を望んでるんじゃないかな。個人的にはそうだし。でも……複雑な状況でもある。俺がどうにか出来ることじゃないし、説明し尽くせるようなことじゃないよ。ただ、アメリカ人がブッシュを支持したのは、誰かリードする人間が必要だったからだ、って気がするんだ。それが彼だって思う人達もいれば、そうじゃないって思う人達もいる。でも、理解しなきゃいけないのは……もしアメリカ人全員が投票したら、ブッシュが大統領になってなかったかもしれない、ってこと。だろ?　別の大統領だったかもしれない。でも、実際は投票しなかった人が大勢いて。最悪だったね。だって、90年代にビル・クリントンが選出された理由の一つは、MTVがまったく別の年齢層を引き込んだからなんだ!　若い世代に投票を促して、ものすごい変化をもたらした。ビル・クリントンが大統領選に勝ったのは、若い層を引き込んだのがすごく大きかったんだよ。でも今回、そういうことは起きなかった。大勢の人が投票所に足を運ばなかったんだよな」

●今の話を聞いていると、今の状況において、あなた自身、そしてあなたの周辺の見方と、アメリカ国内の世論、特にメディアにおける世論とではかなりの温度差があるということでしょうか?

「賛成出来るところもあるし、出来ないところもあるな。一つ賛成出来るのは、今は国連が事態に対処してるところ。"国々の連合" としてね。アメリカが "世界の警察" なんかになるよりは、世界が世界の問題を解決しようとする方がずっといいと俺は思う。アメリカがファッキン・ボスになっちゃいけないんだ。高校の校長みたいな立場に思われるべきじゃない。アメリカ人も他の全員と同じく、地球の一市民として扱われるべきなんだよ。だからこそ、国連ってものがあるんだから。勝手にイラクに介入して、大勢の人達の上に爆弾を落としたりするより、国連が世界というコミュニティとして問題を解決しようとする方がいい。今のところ、幸いそうなってるんだけどね……でも、これからどうなるか。ただ俺は、これまで自分の政治的信条を公には語ってこなかった。そうするべきだって感じなかったこともあるし……うん、俺がどのバンドを聴いてるかなんてどうでもいいのとまったく同じで、俺がどの大統領に投票したかなんて誰にも関係ないし。ただ自分では、俺はリベラルな人間だと

THIS MONTH'S SNOOZER : CRAIG NICHOLLS (THE VINES) pic by KEETJA ALLARD

SUBTERRANEAN HOMESICK BLUES

すべてのブルーにこんがらがったベッドルームのために

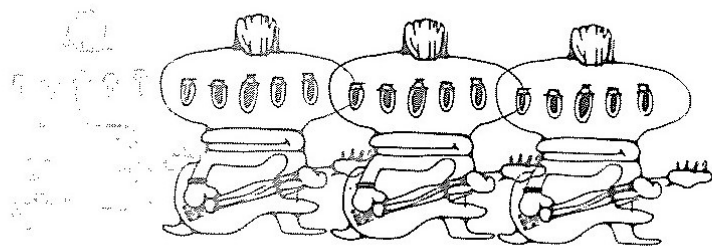
今号は面白く読んでもらえただろうか。それにしても、2003年初頭の号を、2002年のポップ・シーンにおける最大のキーワードのひとつ――「世代交代」を象徴するヴァインズとザ・ミュージックという2バンドのフロントマン2人で飾れたことを、我々は本当に誇りに思っている。それでなくとも、若いアーティストで、表紙を飾れるのはとても嬉しいものだ。勿論、商業的にはかなりの冒険でもある。ザ・ミュージックの場合、ここ日本では、10万枚近いセールスを上げているが、現在の彼らは、いささか露出過多なところがある。この表紙を決めた後も、音楽誌各誌に次々と出てくる記事に、「バンドにとってはマイナスな部分もなくはないよなぁ」と思わなくもなかった。

ヴァインズの場合は、アメリカで破格の成功を収めているものの、ここ日本ではようやく気運が高まってきたという程度。いまだ未知数の状態だ。それに今もっともハイプ扱いされているバンドのひとつでもある。それ以上に、今もっとも同業者からのバッシングが激しいアーティストであるのは、おそらくあなたも知るところだろう。今号の「ロック重箱の隅」でも、そうした話題が出て来るが、おそらく、そこでのヴァインズに対する岸田繁の視点は、現在もっとも一般的なものだろうと思い、敢えてその部分を残すことにした。

そう、実際、英米におけるヴァインズのあまりに急激な成功は、メディアの大々的なハイプと所属レコード会社の大々的な宣伝がなければ、ありえなかったものだろう。ただ、こうした状況を横目で見ながら思い出すのは、1stアルバムをリリースした後、シングル「クリープ」がいきなりアメリカでブレイクした当時の、レディオヘッドだ。勿論、彼らの場合、英国プレスから持ち上げられるどころか、暗い、古い、醜いと、ひたすら否定的なことばかり書き立てられていたという違いはある。『OKコンピューター』以降、ありとあらゆるミュージシャンから過剰に賛美されるようになったレディオヘッドしか知らない若い読者は信じられないだろうが、当時の彼らは、「クリープ」のスマッシュ・ヒットのおかげで、本国イギリスよりも遥かに有名になってしまい、イギリスのアーティストからは妬まれ、アメリカのアーティストからは一発屋のハイプ・バンド扱いされるという、本当にひどいありさまだった。

そして、面白いのは、どちらのバンドも、少し前までは彼らに少しも興味を持っていなかったアーティストが、ライヴで共演するやいなや、いきなり彼らの熱烈なファンになってしまうという点だ。例えば、ヴァインズの場合、この号の表紙の取材の頃までは、ロブはほとんどヴァインズに興味を持っていなかった。というか、むしろ否定的だった。方や、クレイグは、信者と言っていいほどのザ・ミュージックのファン。そんなこともあって、撮影の現場では、取材担当の唐沢はかなり肝を冷やしたらしい。ところが、数週間のアメリカ・ツアーを終えた後、日本に彼らザ・ミュージックが訪れた時は、メンバーはほぼ全員、もはや熱狂的なヴァインズのファンと化していた。そう、伝え聞くところによれば、あまりに出来、不出来の差がありすぎる、彼らのライヴだが、やはりこれがポイントなのだ。

ところが、表紙を入稿しようと思った矢先の来日中止の報せである。ライヴに接することで、ヴァインズに対するイメージにも大きな変化があるだろうと思っていただけに、これは本当にショックだった。そして、もうひとつ、別な意味において、今回の来日中止は残念だった。思い出すのは、やはり内外からの過大なプレッシャーで満身創痍だったレディオヘッドの初来日公演。当時、行なわれていた2ndアルバムのレコーディングは遅々として進まず、予定されたシングルのリリースは見合わされ、ほとんど自身喪失になりかけていた彼らレディオヘッドを救ったのが、既発曲のみならず、新曲に対して熱狂的な反応を見せた日本のファンだったという逸話は有名だ。僕には、彼らヴァインズと日本のファンとの出会いが、今現在、過剰なプレッシャーと無神経な中傷にさらされている彼ら――特に、クレイグ・ニコルズをサルヴェージすることになるのでは、という予感があったのだ。

今号のアメリカンHi-Fiのインタヴューで語られているのは、ヴァインズが来日公演をキャンセルにして、オフに入ることを決めたきっかけとなったボストン公演だ。ステージ上で、クレイグとパトリックが乱闘騒ぎを起こし、その後

のツアーを続行するのは不可能という判断に至ったらしい。最悪の場合、解散もあるのでは、という噂さえ立っている。我々はそうならないことを祈っているが、決して予断は許さない。今後も、その経緯については伝えていきたい。

それはそうと、本誌のベスト・アルバムのセレクションの結果は、どうだっただろうか。決定的な1枚には欠けてはいるが、特に欧米のメインストリームのポップ・ミュージックに関して言えば、平均的なアヴェレージはかなり上向きな状況にあるのではないだろうか。とにかく、今回は、上位の順序を決めることよりも、ベスト50から何を落とすかを決めるのが大変だった。悔いが残っていないと言えば、少し嘘になる。正直、アルバム第30位以降の、次点を含む30数枚に関しても、そこから漏れた20数枚のアルバムに関しても、内容的には大差はなかったように思う。特に、結果的に多くの日本のアーティストの作品が選外になってしまったのは、とても残念だ。

例年のベストもの企画は、通常の号のフォーマットではきちんとフォーカス出来なかった対象を、違った角度から、改めてフォーカスしようという意図から出発している。ところが、むしろそういう視点からではなく、選から漏れていることや、順位があまり高くないことなどに過剰な意味を汲み取られる場合もある。何かしらの断定というものは、常にそうした、思いもしなかったような反応を引き起こす危険を伴うことは最初からわかっているし、それをわかった上で、敢えてこうした企画を試みているわけだから、言い訳をするつもりはない。そもそも、あらゆるコミュニケーションは、あらかじめ誤解と勘違いの可能性を孕んだものだし、それがメディアを通した場合、よりアンプリファイされることは避けられないからだ。だが、それでも我々はこうした、対話や議論のきっかけを作り続けたいと思う。

昨年末に、とある音楽誌のベスト・セレクションに目を通したのだが、あまりにも発見や驚きがなくて、少しがっかりした。それに、全体としての独自の批評軸も感じられなければ、特定の個人の主観も見えてこないという、とても中途半端なものだった。単純な話、「こんなことをやっていても、少しも楽しくないだろうな」と、ただ同情が先立つような内容だった。

今年、ベスト・アルバムを選出するにあたって、留意したポイントがひとつだけある。それは、自分自身が10年後にそれを見た時に、ある程度、納得出来るものにしたいということだ。例えば、デイヴ・マーシュが『ローリング・ストーン』誌において、1970年のベスト・アルバムにザ・フーの『フーズ・ネクスト』を選出していたことは、僕自身に多大な影響を与えている。もしそうでなくとも、僕は何かしらの形で『フーズ・ネクスト』という作品にアクセスしていたはずだが、その事実がなければ、タイミングを逃している可能性もなくはなかった。しかも、それが引き起こされたのは、その選出から10年近く経ってのことだった。そして、僕はその事実に、とても感謝している。

そして、やはり『ローリング・ストーン』誌が、1980年のベスト・アルバムにザ・クラッシュの『ロンドン・コーリング』を選出したことも、僕にとっては大きかった。僕にとってクラッシュは、ようやくリアルタイムで接することの出来た「俺のバンド」だったし、当時の僕にとっては、『ロンドン・コーリング』というアルバムはそれまで接したすべての中でベストと感じられるものだった。そして、その翌年、僕に『フーズ・ネクスト』を引きあわせてくれた雑誌が、自分自身の生涯ベスト・アルバムを「No.1」と認めたのだから、当時の僕はどこか自分が海の向こう側の見知らぬ人々と、ポップ・ミュージックを通じて、確かに繋がっていることが証明されたような気分になったのだ。

勿論、僕のようなとても幸福な経験はまれだと思うし、むしろ逆に、我々のセレクションがあなたの気分を逆なでするすることだってあるかもしれない。でも、我々は出来ることなら、見知らぬ者同士を繋ぐ媒介になりたいと思う。

個人的には、10年後、18歳になった自分の娘にとって、このセレクションが何かしらの刺激を与えるものになってくれるように……少なくとも何かしら意味のあるものになりうるだろう状況をイメージしながら、その選出に向かった。さて、あなたの感想はいかがなものだろうか。是非、リーダーズ・ポールへの投票という形で意見を聞かせて欲しい。

（田中宗一郎）